

(十) 寶泉寺 (神辺町徳田)

福塩線湯田村駅の北側に隣接して建つ高野山真言宗準別格本山のお寺である。

乗如(じょうによ)上人の残した書「龜居山觀音院寶泉寺縁由実記」によると天長年中(九世紀前半)の創建で、その後いつの頃か廃寺となる。西安く観応年間(一二九九く一三五二)の頃、宥鍔(ゆうかん)上人が廃寺を興して自ら住持するが、その後、若干の年月で再び荒れてしまった。

元禄年中(一六九〇年代)に宥辨(ゆうべん)上人が再建に尽くし、中興の祖(現在はここを一世とする)となるが、元禄十三年(一七〇〇)の火災でことごとく灰燼に帰ってしまった」と伝えられている。

その後、代々住職が復興に努め、九世観如(かんによ)上人の時、度々みまわれる洪水対策として、徳永徳右衛門の援助で盛り土をした本堂の改築が行われ、十二世乗如(じょうによ)上人によって室内の再整備が行われた。その時、乗如上人は高野山正智院より壁面を移し堂壁に貼り、さらに備中国鴨方の画家田中索我(さくが)に山水人物などを各室の襖や杉戸に描かせるなど、その華麗さに人々はここを「雛御殿(ひなごてん)」と呼んだそうある。それらを経て天明六年(一七八六)に再建の成就をなした」とある。

一 「送惠充上人之高野山 録舊作」

惠充上人の高野山に之(ゆ)くを送る

旧作を録(しる)す

黄葉夕陽村舎詩

後編 卷八



夙願君業進
今恨君學成
學成何所恨
遠近人爭迎
妙選竟難辭
抛此白社盟
迢遞鼎臺遠
蒼茫薇海橫
別離老愈難
此行轉愴情

夙(つと)に願う君が業(ぎょう)の進(すす)まんを
今恨(うら)む君学(がく)の成(な)るを
学成(な)るは何の恨(うら)む所ぞ
遠近(えんきん)人争(あ)い迎(む)えて
妙選(みょうせん)竟(ついに)難(がた)し
此(この)白社(はくしゃ)の盟(めい)を抛(なげう)つ
迢遞(しょうてい)たり鼎台(ていだい)遠く
蒼茫(そうぼう)たり薇海(びかい)横たわる
別離(べつり)老(おい)て愈(いよいよ)難(がた)し
此(この)行(ぎょう) 転(うた)た情(な)けを愴(いた)ましむ

惠充上人く寶泉寺十二世住職(後述参照) 妙選、念入りに選ぶ 白社く清い仲間

迢遞く遠くへだてること、遠いさま 鼎臺、高野山 蒼茫く見渡す限り青々として広いさま

薇海く瀬戸内海

(大意) かねてから君の大成を願っていたが、今こうして君が

学問を成就したことを恨めしく思う。

学問を成就させたことの何を恨めしく思うのかといえは、

遠近の人々は、みな競って君を迎えることだろう。

そして、よく吟味してわが身のふりかたを選択しようにも、

君はついに断れない立場になってしまふことだ。

この郷里での契りをなげうって君ははるか高野山へと登って



いつてしまい、青く広々とした瀬戸内海が横たわるばかりだ。
年老いばますます別れがつらく、この旅立ちは私の心を悲しませることだ。

(情景)

学芸の友、人生の友、親友を高野山に送り出す友情の五言十句。友の大成を願う期待と残される者の寂しさ。往けよ、往くな。この心情のエゴイズムをぶちまけたところに却って真情がみえる。先述の漢詩は、寛政二年(一八〇〇)福山藩家老内藤景充宅で、高野山に登る惠充上人の送別会の詩会が行われており、その時詠まれた詩ではないかと言われている。

茶山が交流した神辺の僧侶には、惠充上人の他、嶺松上人(光蓮寺)大空上人(遍照寺)如実上人(国分寺)がある。他にも龍泉寺、西福寺、東福院、寒水寺にも足繁く通って詩を詠んでいる。

二「雨日同充上人賦分烟字 時上人將之阿州」

集外

新泥滑々雨綿々
弱柳嬌花春正妍
載酒誰尋生白室
臥痾虚渡踏青天
雉雌屋外山含晚
市散橋頭竹罩烟
明日渡杯滄海遠
自知三徑轉蕭然

新泥(しんदै)滑々(かつかつ)たり 雨綿々(めんめん)たり
弱柳(じゃくりゆう)嬌花 春正(まさに)妍(けん)なり
酒を載せて 誰か尋ねん 生白(しょうはく)の室
痾(あ)に臥して虚しく渡る 踏青(とうせい)の天
雉(きじ)屋外に雌(な)いて 山は晚(くれ)を含み
市散じて橋頭(きょうとう) 竹 烟を罩(こ)む
明日渡杯(とはい) 滄海(そうかい) 遠く
自ら知る 三徑(けい) 轉(うたた)に蕭然(しょうぜん)たり

充上人へ惠充上人

阿州へ阿波の国

妍く美しい

新泥滑々雨で道がぬかるむさま

綿々しとしと降る 生白室へ茶山の居宅 踏青天へ春の青草を踏んでいく。最もよい時節
雉く鳴く 含晩く夕暮の色が忍び寄る 罩烟く夕靄がたちこめる

渡杯、船で海を渡る。杯は杯のような小舟 三徑く小径 蕭然くものがなし

(大意)

しとしとと降る雨に道はぬかるみ、たおやかな柳、あでやかな花と春の美しい季節だ。誰かこの俗離れした自分の室に、酒をさげて来ないものか。病に伏して春の好季を空しく過ごすことだ。雉は屋外で鳴いて、山は夕暮れが忍び寄り、市の賑わいは終わって、竹藪は夕靄が立ち込めている。折よく訪ねてきてくれてありがたいが、あなたは、明日この悪天候をおしてはるばる海を渡って、阿波に行かれるとの事。せめて、門まで送って出て、庭先の小径に立って見送るこの寂しさはやるせないことだ

三「除日小集招惠充上人」

除日 小集に惠充上人を招く

黄葉夕陽村舍詩

前編 卷八

會者岩子秩高島百穀牧千里向文二讚岐人松下成叔播磨人鷓鴣大卿備中人小早川景汲備後人

會計家家期歳杪
催科討帳人奔擾
算還詩債愧無才
招得已公論下掃

會計は家々(かか)歳杪を期す
催科(さいか)討帳(とうちよう) 人々奔(はし)り擾(さわ)ぐ
詩債(しさい)を算へ還すに 才の無きを愧(はじ)る
已公(しこう)を招き得て 下掃を論ず

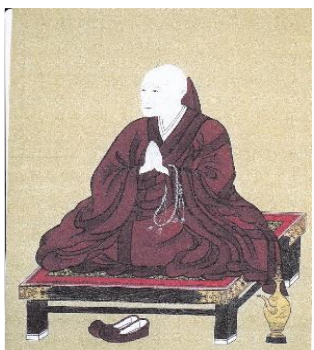
除日く大晦日 科く税など割り当てられたもの 愧るくはずかしく思う 討帳く帳面を調べる
己公く杜甫の友人、ここでは惠充上人を指す 下掃く憂いを除く 論くかたる

(大意) 一年の支払いについては家々では、大晦日まで納めることになっている。税など割り当てられたものを催促したり帳面を調べたりして、掛け取りに走り回っている。(茶山は) 詩の債(借銭)を勘定してかえすのに、才の拙いことを恥じるばかりだ。杜甫が己公に頼んだように、私も惠充上人を招いて憂いを除くために語り合いたいものだ。

【ちよっと休憩】 乗如(惠充) 上人について

(宝暦九年(一七五九)、備後国安那郡徳田村に生まれる。名を乗如、惠(慧) 充・丹崖と号す。明和八年(一七七二)、十三歳で真言宗寶泉寺(ほうせんじ)へ入る。住持観如上人に従って剃髪、傍ら茶山に経史、詩書を学んだ。安永七年(一七七八)、高野山に登り、寶性院門主兼正智院住職の覚道法印の愛顧を受ける。寛政五年(一七九三)、郷里の観如上人入寂をうけて寶泉寺の住職となった。

寛政十一年(一七九九)、四一歳で再び高野山へ入り、その聖善院の住職となり、やがて正智院に転住、文化十一年(一八一四)、五十六歳で碩学に推挙される。文政四年(一八二二)、寶性院門主となり、師覚道法印の後を継ぐ。天保六年(一八三五)没する。近年、襖の裏紙から書簡や漢詩、和歌が四十一点が発見された。その中には茶山や菅恥庵からの書簡をはじめ内藤景充、山室箕山など福山藩の重役の名前も見られる。



高野山寶門主乗如前官壽像

茶山日記に、茶山の二度目の江戸行き文化十一年九月から十二月にかけて、江戸に滞在していた惠充上人と数回会している。その際「書、酒、茶、塩漬けの松茸を恵む」と記している。さらに、江戸から帰った後にも、書や氷豆腐(高野豆腐)等の贈り物を受け取っている。師弟でもあり、友人でも会った二人の会話はどんなものであったのだろうか。寶泉寺・乗如上人については「菅茶山とゆかりの人々」(菅茶山記念館発行)にも詳しい。

【ちよっと休憩】 天明の一揆と徳永徳右衛門について

門前に石碑「天明之義民」が建っている。福山藩で起きた義民の顕彰碑である。長雨や洪水等による「天明の飢饉」の中、天明六年(一七八六)藩の厳しい税の取りたてに耐えかねた農民数万人が決起して始まった。芦田川一帯で篝火をたき、年貢の減免やお助け米の支給などを要求。藩は稗六千石の購入代金の貸付を約し、一揆は解散する。しかし、藩は約束を守らなかったため、再び一揆が起きる。この一揆で百姓たちの願い条を差し出したのが、徳田村庄屋の徳永徳右衛門らである。徳永徳右衛門は農民からの信頼も厚く、農民の窮状をよく知っていた。当時、一揆の首謀者には厳しい処置がなされていたが、この天明一揆は犠牲者を出さないといい全国的にも特筆される一揆である。

* 茶山は農民たちの暮らしや困窮をどう見ていたのかは後日に回したい。

幕政・藩政批判の詩については先輩たちの研究により明らかにされている。顕彰会でも、西原千代さんの講演会を開催しており、講演を記録した「菅茶山の政治批判詩について」を出版している(二〇〇八年五月発行)



参考文献

茶山詩話

菅茶山先生遺芳顕彰会

亀居山観音院寶泉寺

亀居山観音院寶泉寺 亀山本弘住職

郷土ゆかりの人たち

菅茶山記念館ホームページ

茶山詩 五百首

島谷真三・北川勇 児島書店

菅茶山顕彰会会報

菅茶山顕彰会

黄葉夕陽村舎詩

栗田 豊

中条の石造物

中条学区まちづくり推進委員会

教育者 菅茶山

菅茶山記念館